

- 主要諸元: (ECO-L 4WD)
- 全長×全幅×全高/3395×1475×1530mm
 - ホイールベース/2400mm
 - トレッド/前:1295mm 後:1290mm
 - 車両重量/760kg
 - 最小回転半径/4.2m
 - エンジン/658cc 直3 水冷4サイクル
 - 最高出力/52ps/6000rpm
 - 最大トルク/6.4kg・m/4000rpm
 - JC08モード燃費/30.4km/ℓ
 - ミッション/CVT
 - ブレーキ/前:ディスク 後:リレーディング・トレーリング
 - タイヤサイズ/145/80R13
 - 駆動方式/4WD
 - 乗車定員/4名
 - 車両本体価格(札幌地区)/1,000,000円(消費税込)

軽自動車としては珍しくわずか4000rpmで最大トルクを発生するエンジン。これもまた低燃費に貢献する一つの要因である。



なかなかのスペース効率を誇るアルトエコのインテリア。大容量という意味では先頃同じくスズキから発売された「スベシア」に一步譲るが、同じエコ指向のクルマでもこちらは居住性を一段と高めるといった部分でお互いに住み分けが出来ている。逆の言い方をすれば、普段から荷物をそれほど載せない、という向きにはこのアルトエコの方が使い勝手は格段に良いように思われる。

■評価の高い「H」技術

先述のように、新アルトエコには専門家の高い評価を得た「スズキクリーンテクノロジー」が採用されているので、ここであらためて触れ

エクステリア、車体サイズともに、2011・2012年モデルとほとんど同。ボディにおける改良点はもっぱら見た目では分からない部分とすることになる。実は新しい軽量衝撃吸収ボディ「ECO」を採用したことで20kgもの軽量化に成功しており、それが低燃費化へ少なからず貢献している。

インテリアも変更点はほとんどないが、後述するコトラインアシスト照明をはじめ、新システム導入にともなうインパネ表示に改良が見られるため、運転席からの景色という点においてはマイナーチェンジを実感できるハズだ。

2012年モデルはシートにビビッドな配色も用意されていたが今回はシンプルなカラーリングに徹しておりその効果で空間に統一感がある。アルトの既存ユーザーの中には、ひとつのモデルを10年単位で乗り続ける人も多いと聞くが、そんなアルトファンにとっても、飽きのこない内装と言えそうだ。

搭載するパワートレイトは従来のR06A型を進化させた新世代エンジン。コモンレ、先立つて発売されたスベシアとも共通のもので、信頼性は極めて高い。52ps/6000rpmの馬力と、6.4kg・m/4000rpmの最大トルクは、数字の上では2011年モデルから変わっていないものの、摩擦抵抗の低減と燃焼効率の向上を図った。また、副変速機付CVTも改良型を採用しており、複合的に燃料消費を抑えることが可能となっている。

気になるグレード構成は、全面にレギュラーガラスを備えるなど装備を充実させたS100万円と、シンプルなし90万円との2種、ともに4WDバージョンが用意されている。

これにともない、数値化された採点評価によりドライバーにエコドライブの達成度を知らせる機能がインパネに付随している。エコに対する意識の高い人はもちろん、そうでない人もどのような運転が燃費に影響を与えるかをリアル体験できるとあって、日常の何気ないドライブリングも少し違った視点で捉えることができそうだ。

これらを標準装備した新アルトエコはユーザーにとって身近な存在でありながらも、自動車に現在できるエコロジー系の技術を多く兼ね備えた、格調高い車なのである。

最後に、アイドリングストップ時もエアコンが作動し続ける「エコクール」。エンジン再点火後にエアコンが再稼働する場合は、室温上昇にともなって急激に冷房が送風され、それがガソリンの浪費となってしまう。エコクールは、室温を保つことにより側面から燃費を向上させる仕組みである。

つまり、発電時のガソリン消費を軽減するものである。

次に、言わずがなの「アイドリングストップ」システム。時速13km以下でエンジンがストップし、無駄なガソリン消費を抑制する。

最後に、アイドリングストップ時もエアコンが作動し続ける「エコクール」。エンジン再点火後にエアコンが再稼働する場合は、室温上昇にともなって急激に冷房が送風され、それがガソリンの浪費となってしまう。エコクールは、室温を保つことにより側面から燃費を向上させる仕組みである。

コンパクトなボディにエコ技術満載



SUZUKI ALTO ECO



■テキスト=青柳 健司(フォトライター) ■Photo=川村 勲(川村写真事務所) ■取材協力=スズキアリーナ札幌北 ☎(011) 721-8335

プロフィール

■ガソリン車No.1低燃費

愛くるしいルックスと小さなボディに反して、アルトはなかなか野心的だ。1979年に初登場したその時も、それまでなかった新ジャンルのパイオニアであったし、小兵ながらもスズキの屋台骨を力強く支えてきた。もちろんこれまで4WDも、ターボも、エアバックもその時代の新技術を積極的に取り入れている。2011年になると派生モデル「アルトエコ」も加わり、低燃費化へと邁進。いわゆる第3のエコカーにおいて堂々の主役を張った。そして今回、マイナーチェンジとなる新アルトエコが掲げてきたのは、さらなる低燃費の実現と、新しいドライブサポートシステム導入という、大きな2枚看板であった。

まず、こちらも書目せずにはいられないのが、JC08モード33.0km/ℓ(2WD・4WD車は30.4km/ℓ)とガソリン車の中で現在最も優れた燃費性能を獲得した点である。先代の2012年モデルも、ガソリン車No.1低燃費をアビールしていたが、それに甘んじる事無く前進した結果、自己新記録を打ち立てたというわけだ。その裏付けとなっているのは、ワゴンRに搭載して2013年テクノロジー・アワード(主催/日本自動車研究者・ジャーナリスト会議)を受賞した、「スズキクリーンテクノロジー」にほかならない。

■軽量化と効率化

写真でお気づきの向きも多いと思われるが、



ディーラーメッセージ

スズキアリーナ札幌北

カーライフ
アドバイザー **小野 早耶美**さん

新しいアルトエコの大きな魅力は、JC08モード33.0km/ℓというガソリン車No1の低燃費と、エネチャージをはじめとした「スズキグリーンテクノロジー」を採用したこと。若いママさんから高齢の皆さんまで、ショールームにお越しの方は皆さんその点にはたいへん関心を持っていただいています。アルトは発売以来、故障が少なく長持ちする車として、たくさんのユーザーの皆さんが親しみを感じてくださいます。そのご期待にしっかりと応えできる車に仕上がっています。試乗の際にはぜひ、エコスコアでECO80以上に挑戦してください。



インプレッション

エコドライブへ高まる意識

今回試乗に提供されたのは、レタイプの4WDバージョン（100万円）。

イグニッションキーを回してエンジン始動するあたりは、ボタン発火の車種が多くなっている昨今にあつて、筆者を含め年配層ならば親近感を覚えるところ。ただ、オプションでキーレスプッシュスタートシステムを選択できるので、ボタン派のこの向きは安心を。

アクセルをわずかに踏み込めば、なんとも素直な反応で発進。いきなり渋滞気味の幹線道路に侵入する必要に迫られるも、難なく流れに乗ることができた。

山椒は小粒でもなんとやらを地でいこうという狙いなのか、あるいは単にスタッドレスタイヤとの相性なのか、ハンドリングは予想外にカッチリと硬質の味付けである。その分安定感はずいぶん良く、かつての軽自動車にありがちだった走行中のフラつきは最早皆無と云つてよい。ボディサイズなりに、路面に連続して凹凸が現れる場合は突き上げ感が伝わってくるが、軽自動車を乗り継いでいる人ならば静粛性という点においてもかなり健闘していることが分かるだろう。

加速性はほどほどといった印象で、高速道路の長時間ドライブが得手とは言えそうもない。その一方で、最小回転半径は4.2mと非常に優れた数値。混雑した街中をスイスイと走るにはこの上ない相棒となってくれる。

スピードメーターの外周には、先述のエコドライブアシスト照明が点灯。効率の良い運転を

するとブルーのライトがグリーンに変わる。はじめはついその変化を意識してしまったが、やがて無意識に無駄な加速を避ける運転をしている自分に気づき、視覚効果の絶大さにあらためて納得した。

また、エンジンをOFFにした時、その間の運転に応じたエコドライブ達成度がインパネ右下に100満点で表示される「エコスコア」。これもドライバーの運転に対する意識の持ち方を変えるきっかけになるだろう。ちなみに筆者が獲得した最高点は、ECO78。優良ドライブの目安になる点数はECO80とのことで、エコジョーを旨指してもつひと頑張りといったところである。

クラスを牽引する実力

新型アルトエコは、やはり野心的であった。ただその方向性は、スピード、加速、コーナリングといった運動性能の向上を見据えたものではなく、より効率的によりスムーズに走ること。その飽くなき追求こそが、コンパクトなボディに秘められたパッションである。軽自動車全体にも言えることだが、ムタを徹底的に排除することがユーザーの志向性と合致し、またメリットとして歓迎される現代において、新型アルトエコが担う役割は非常に重要である。

そのルックスから、メインターゲットは主婦を含む20から30代の女性であろうことは明白。しかし、上位車種からの乗り換えを考えている人などにとっても、選択肢に加えて検討する価値は高い。